

【視察調査報告書】

委 員 会 名	文教経済委員会
委 員 名	【委員】 9 名 石井宏和委員長、古里幸太郎副委員長、高橋剛委員、九鬼ともみ委員、市川克宏委員、小林秀司委員、星野直美委員、吉本孝良委員、中島正寿委員
日 程	令和 7 年（2025 年）10 月 14 日（火）～10 月 16 日（木）
詳 細	
視察日及び視察先	10 月 14 日（火）石川県 小松市
視 察 内 容	日本遺産等を生かした地域振興について （日本遺産『珠玉と歩む物語』小松 ～時の流れの中で磨き上げた石の文化～）
概 要	<p>小松市は、平成 28 年度に日本遺産として認定され、今年 7 月には継続審査を経て認定継続が決定した。「珠玉と歩む物語」保護条例を制定し、石の文化の保護と継承を推進しているほか、こまつ新交流ビジョン 2024 等の各種行政計画への日本遺産事業の位置づけや、産業観光「GEMBA」プロジェクトの推進を行うなど、日本遺産を通じた地域活性化・観光の振興を図る土台が整備されている。</p> <p>地域資源の磨き上げによる文化振興と観光活性化の手法を学び、文化と産業の融合による地域づくりの可能性について理解を深め、今後の所管事務調査の参考とするため、視察を実施した。</p>
委員長所感 （意見・課題・本市への反映など）	<p>●石井宏和委員長</p> <p>弥生時代から碧玉製管玉など精巧な装飾品を作り、良質な凝灰岩切石を古墳や石垣や蔵などに使ってきた石の文化を、実際の石を見て触れることでリアルに多様に感じる事ができた。</p> <p>駅に隣接した「Komatsu 九」は開放的で、土器などの展示も明るく、古代の交流の跡など示す大きな地図など興味深いものだった。九谷焼の展示工房「セラボクタニ」では、花坂陶石を砕いて陶土にする過程や、顔料や多彩な作品が見られ、焼物の素材も良質な石であることがよくわかった。江戸時代から採掘が始まった多くの鉱山も栄え、それが今の重機メーカーのコマツにつながるなど産業も盛んな小松市の石の文化拠点施設への来館者数は、昨年度 20 万人を超え、野外では那谷寺が特に人気だとのこと。宿泊者が増えたか質問したが、日本遺産の影響でどれだけ増えたかははっきりしないとの答えだった。勧進帳で名高い安宅の関などは「北前船寄港地・船主集落」の日本遺産にもなっていて、歌舞伎の名門市川家に指導を仰いで小中学生の歌舞伎の稽古と公演も例年行っているとのこと、これも貴重に思った。</p> <p>八王子城の石垣も、深沢山から切り出して巧みに積み上げ、稀有な焼物のまきびしが出土したことなど、さらに強くアピールしたいものと思った。また、八王子市でも、繭や糸や機織り機や織物など現物に触れる展示をはちはくなど</p>

	<p>で行ってきたが、そうした展示を強化すること、そうした物が見られる場を増やすことが大切だと思った。</p>
<p>委員所感 (意見・課題・本市 への反映など)</p>	<p>●古里幸太郎副委員長</p> <p>石の文化に魅力をいただき視察に臨んだ。また、北陸新幹線の開通に伴う小松駅のリニューアルによりオープンした小松市観光交流センター・Komatsu 九が、どのように日本遺産を生かした施設であるか注目した。お話を伺い、弥生時代の碧玉の玉づくりから始まり、鉱石、宝石群、凝灰岩石材、九谷焼原石の陶石等、石の資源を見出してきた歴史の深みを感じた。人・モノ・技術の交流が長い時を経て、今もなお豊かな文化として地域に根付いていることにも感銘を受け、有形文化財、重要文化財である那谷寺には言葉では言い表せない歴史の重みを感じ、是非訪れてみたい気持ちになった。</p> <p>九谷セラミック・ラボラトリーは休館日にもかかわらず丁寧なご案内をいただいた。九谷焼の商品展示や体験工房もあり、今後も伝統産業を伝え残していく大事な場所として、一層存在感を発揮されることを願う。</p> <p>Komatsu 九については、一番は職員の皆様の熱量を感じた。小松駅も含め施設の細部にわたり石材等をちりばめられ、石の文化を伝えていこうとする意気込みが伝わってきた。さらに、観光案内所とショップ、コワーキングスペース、ギャラリー等を組み合わせ、ひと・もの・情報の交流拠点として活用される仕組みを作られたことも、日本遺産重点支援地域認定への要素となったように思った。観光地ではない中での挑戦心に、活路を拓くヒントを得た思いである。</p> <p>●高橋剛委員</p> <p>駅を降りたところから全力での日本遺産 PR に感動した。装飾に使われているものも、日本遺産のストーリーを感じさせるものになっていたり、何気なく触れるところに、そういった工夫が凝らされているのが良かった。また、駅から雨に濡れることなく日本遺産を感じる、知ることのできる施設もあり、観光客もフラッと寄ってみたいくなるような設計がされていた。</p> <p>八王子市ではどうしても建物の中に入らないといけないので、そのあたりは非常に参考になる導線の考え方かと感じた。駅の中の土産屋や、カフェ、観光案内に至るまで統一されたコンセプト、設計のもとにあるので、一体感があった。また、KOMATSU をはじめとするモノづくりの文化が『観光』というフェーズにまで進化し、多くの方に小松市を PR することに繋がっていることに感動した。地域の強みを観光への魅力へ変える、見せ方ひとつでいろんな工夫ができるのだな、と改めて勉強になった。</p> <p>●九鬼ともみ委員</p> <p>観光交流センター「Komatsu 九」は、北陸新幹線の新駅に隣接し、待ち時間や雨宿りでも気軽に立ち寄れる拠点として設計されていた。観光案内や土産店、カフェだけでなく、コワーキングやイベントスペースを備え、市民と来訪者の双方に開かれた“居場所”になっている点が印象に残った。また、九谷セラミック・ラボラトリーでは、伝統を守るだけでなく、原料の地域調達など新たな挑戦に取り組む姿勢が強く心に残った。</p>

日本遺産「珠玉と歩む物語」というストーリーを核に、学校教育や生涯学習、産業観光までをつなぎ、地域文化を日常生活の中に取り入れていることが小松市の強みだと感じる。駅前に展示された巨大な建設機械からは地域産業への誇りが自然に伝わり、文化と産業に新たな光を当てることによって、地域が活性化する姿を見ることができた。

文化継承において、施設を整備するだけではなく、人が集まり語り合う“拠点”があつてこそ次の担い手が育つことを改めて実感した。八王子市でも、文化を活かす仕組みや拠点のあり方を考えるきっかけとしたいと思う。

●市川克宏委員

小松市は「時の流れの中で磨き上げた石の文化」というストーリーにおける日本遺産の認定を契機に、地域の石材・鉱物・加工技術が歴史的・文化的に高い価値を持つことが広く市民的に認知された。このことを受け、「珠玉と歩む物語」保護条例をはじめ、生業支援による技と心の継承、環境整備による資源の保全と活用、情報発信による知名度アップを柱とした「こまつ珠玉と石の文化」10年プランが策定され、日本遺産が市民共有の財産として、次世代に継承すべきものと位置づけられているところに注目した。

また文化財保護にとどまらず、未来にむけて石文化を活かした観光振興や学校教育、地域学習など地域の魅力を発信し、活性化を図るなど、地域の歴史・産業・自然との関係性を尊重しながら、持続可能なまちづくりを見据えたものとしての日本遺産とまちづくりの深い関係性を学ぶことができた。

●小林秀司委員

平成28年度の日本遺産認定から令和3年に継続審査から重点支援地域となっており、北陸新幹線の令和6年の延伸に向けた施設整備において当該日本遺産のストーリーを活かした整備となっている。このような地域が変化する一大事業の中での「日本遺産」、本市における「桑都の杜」整備と重ね合わせて考察した。鉄道駅とはいえ利用者は少ないながらの施設整備により若年層の利用を呼び込むなど、観光の情報発信だけでなく地域との繋がり活性化にも寄与していた。

このストーリーの根幹ある「モノ」部分の「石」について、ストーリーにある「珠玉と歩む」とあるがここでは珠玉は形容詞ではなく名詞となり、弥生時代から鉱物全般を特産としていたが現在のメインは「九谷焼」である。ストーリーの中にある強力なコンテンツである「九谷焼」、加賀エリアだけでなく石川県内で「特産物」とされておりどのように取り扱うのか関心があった。セラボクタニは原材料の産出と窯元作家の加工の相関関係、製品の学術的な研究と芸術作品の側面の価値について明示しかつ体験ができる施設であった。この地域における「九谷焼」に対する思いにより、この「九谷焼」価値について研究等への協力が得られこのような施設が運営できていると感じた。

●星野直美委員

小松市の日本遺産「珠玉と歩む物語」は、石の文化と九谷焼という地域資源

が、文化財の保存と活用を通じて地域の物語を発信している。石材の採掘・加工の歴史はこのストーリーの中核を成しており、地域の産業や暮らしと深く結びついている。また、歌舞伎との関係では、市内に実在する「安宅の関」も日本遺産ストーリーと結びついており、地域の歴史と芸能文化が交差する物語性を生み出している。市内の小学校が持ち回りで歌舞伎を演じるなど、地域ぐるみで文化の継承に取り組む姿も印象的だった。

今回の視察では、小松駅構内の案内施設でレクチャーを受け、そこに展示されていた重要な土器を通じて、石の文化の歴史的背景を視覚的に理解することができた。交通拠点に学びの場を設けることで、訪問者が自然に地域文化に触れられる環境が整えられていることは八王子市でも参考になるのではと思った。

さらに、改札の中には九谷焼の大型陶板作品が設置されており、芸術性と地域性を兼ね備えた工芸の魅力を来訪者に印象づける空間演出がなされている。隈研吾氏設計の「九谷セラミック・ラボラトリー」では、製土工程の見学や新人作家の作品購入が可能で、技術継承と若手支援の両面で意義深い施設となっている。小松市の取り組みは、八王子市における文化財活用や発信強化、認定継続に向けた戦略を考える上で、参考となる事例であったと思う。

●吉本孝良委員

小松市の取り組みは、民間主導的に行われていると感じた。株式会社こまつ賑わいセンター（Komatsu 九オフィス）が中心として動かしているが、社長は若手の元銀行マンであり、石の文化・陶芸（九谷焼）など、日本遺産構成文化財をしっかりと全世代に発信していた。駅中にある小松市観光交流センター「Komatsu 九」では、小松式土器が北陸新幹線ルートで東京まで繋がっている展示など、この地域特性もしっかり発信されていた。また、この施設は複合施設であり、ギャラリーエリアの他に、カフェ・コワーキング・フードと4つのエリアがあり、コワーキングエリアを利用した企業支援活動も行われていた。

少し離れた場所にはセラボクタニという小松市が語る石文化と九谷焼を体験することができる施設もあり、九谷焼作家の作品や産地ならではの商品があり、とくに一般には出回らない絵付け前の白い素地の器が購入できるなど、地域産業との連携もしっかりされていた。本市も民間目線での活発な取り組みを進める必要性を感じた。

●中島正寿委員

小松市では「石の文化のストーリー」が2016年4月25日に日本遺産に認定された後、こまつ珠玉と石の文化10年プランを策定し、小松にしかない「石の文化」のSTORYを紡ぎながら、「小松まるごとストーンミュージアム」を構想するなど各地域で拠点整備を着実に進めてきた経過をみると、2021年7月31日に「認定継続」が決定されたのは確かに首肯されうるもの、との印象をもった。

2024年3月16日には北陸新幹線延伸による小松駅開業も契機となって、今後も戦略的観光事業が進むと思われる。新幹線のホームからは世界最大級の鉾

山機械も見えた。建設・鉱山機械メーカーであるコマツの名は、ここ小松市が由来となっていることはあまり知られていないのではないかな。

視察の様子



視察日及び視察先	10月15日（水）福井県 小浜市
視 察 内 容	日本遺産等を生かした地域振興について （日本遺産 海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群～御食国若狭と鯖街道～）
概 要	<p>小浜市は、古代より「御食国（みけつくに）」として都に食材を供給してきた歴史を持ち、また京都へと続く「鯖街道」を通じて人・物・文化が往来した地域である。この歴史的背景をもとに、平成27年度に日本遺産第1弾のひとつとして認定され、令和6年度には他の地域のモデルともなる「重点支援地域」の中でも特に優れた地域である「プレミアム」に全国で唯一選定されている。</p> <p>国の重点支援を受けた先進的な取組を通じて、文化資源の広域連携や持続可能な地域振興のあり方について学び、所管事務調査の参考とするため、視察を実施した。</p>
委員長所感 （意見・課題・本市への反映など）	<p>●石井宏和委員長</p> <p>古代から御食国として海産物や塩など都に届けてきた若狭、その後も都との往来で栄えてきた鯖街道、これらのストーリーで、日本遺産第1号になり、唯一日本遺産プレミアムに認定されたのは、市民の熱意と多様なプレイヤーによる地域総がかりでの取組が評価されてのこと。小浜市は、食のまちづくりを掲げて当選した新市長のもとで2001年に「食のまちづくり条例」を定め、市内12地域でそれぞれの食文化を掘り起こし、保育園・幼稚園児や小中学生にキッチンを使った食育を行ってきたことも貴重で、その拠点となる御食国若狭おばま食文化館も休館日で入れなかったが大きな施設だった。</p> <p>道の駅若狭おばまは、鯖街道ワンダーランドと銘打ち、鯖などの特産物や若狭塗の箸などが並び、街道往来の装束などの展示もあり、活気があった。鯖街道を踏破するウルトラマラソン、ウォーキング、小学生の行事もあり、説明された担当者も走破されたとのことだった。</p> <p>「北前船寄港地・船主集落」の日本遺産の構成文化財でもある護松園は、豪商古川屋の別荘だった屋敷を、塗り箸メーカーが買い取って、市民活動のスペースなど含めて保存と公開を行っている。調度や庭や松がすばらしく、文字をデザイン化した若狭塗模様図鑑に特に感銘を受けた。地域内には古民家を一棟貸しにした宿が8棟あり、稼働率は40～50%ほどで収支はとんとん程度だが、利用者から高い評価を得ているとのこと、見習いたいものと思った。</p>
委員所感 （意見・課題・本市への反映など）	<p>●古里幸太郎副委員長</p> <p>国内唯一の日本遺産プレミアムということで、真っ先に視察候補にあげさせていただいた地域である。重点支援地域から、さらに、特別重点支援地域に認定された取組がどのようなものであったのか高い関心があった。</p> <p>護松園については、旧古河屋別邸を文化財にして、市が側面支援を行う前提で民間に取得してもらった経緯をうかがい、ご苦労はあったようだが、その覚悟が物事を前進させたように感じた。耐震について気になったが、緩和をし文化財として市が補助を行っている点は勉強になった。北前船の商人のおもてな</p>

しの歴史が文化として現代に生き返り、観光客や地域の人々が集う場となっている取組は素晴らしいと思った。

御食国若狭と鯖街道については、10 年前に日本遺産第 1 号の認定となるもっと前からの取組で、2000 年に市長に当選された村上利夫前々市長が食のまちにすることをマニフェストに掲げられ、それがそのまま地域をあげた取組になっているとのこと。また、食のまちづくり条例があることで、首長が変わってもまちづくりの柱がぶれないとの力強さがある一方で、いくら日本遺産プレミアムになっても観光強化に繋がっているわけではなく、課題も明確に捉えられた上で対策や前へ進める取組をされている点が印象に残った。DMOよりDMCを思索中と先を行くお話もあり、八王子市は観光において、まず柱を強化すべきと感じた。道の駅のつくりにも触発を受けた。

●高橋剛委員

民間の宿泊施設だったところを市がサポートすることで文化財として活用、そしてそれが企業にとってのブランディング向上に繋がる使い方は素晴らしいと感じた。文化財を大切に作る企業というブランディングと、市の文化財を維持していくための経費と、どちらも良く考えられていると思う。

また観光地としても魅力の多い道の駅は、鯖というアイテムを前面に押し出し、お店の中の商品やマスコットなど、全てのベクトルを揃えた、非常にコンセプトの分かりやすい建物で好感を持った。人々の心に深く刻まれる印象を作るために、徹底的にそのストーリーを尖らせたPRを行っていくことの重要性が分かった。確かに、なかなかストーリーでは深く印象に残ることは難しく、『鯖』という小浜市の強烈なメッセージは誰にでも届きやすく、すごく参考になった。

●九鬼ともみ委員

小浜市は、日本遺産「海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群」をまちづくりの軸に据え、地域経済の活性化、文化資源の保存活用、魅力向上と来訪者増加の循環を生み出している点が印象に残った。1500 年の往来の歴史を「御食国」や「鯖街道」といった言葉で整理し、市民や団体、若い世代と結びつけながら取組を進めていることが特徴的である。

鯖街道ウォーキングやサイクリング、高校生による宇宙食サバ缶の開発など、多様な主体と連携しながら新たな魅力を形にしている例をうかがった。小浜市には、歴史的に「行き来する文化」を受け継いできた背景があり、離れて見えるものをつなぎ直す姿勢が今も息づいているのではないかと感じた。そうした精神が、新たなコンテンツを生み出す力につながっているように思う。

一方で、文化の担い手不足や産業の継承など、今後に向けた課題も率直に共有されていた。八王子市においても、文化を活かす取り組みを進める際には、市民とともに考え、参加のきっかけを丁寧に積み重ねていく視点が重要であると感じた。

●市川克宏委員

小浜市の日本遺産「御食国若狭と鯖街道」が、文化観光では文化財の公開や拠点整備を契機に観光事業化への展開、また経済の循環ではストーリーを活かした商品開発への事業化など文化と観光、経済の循環型、持続可能な日本遺産の事業展開の取組を学んだ。

小学校をはじめ高校や大学の協業事業などによる日本遺産の普及啓発、さらに鯖街道ランナーやウォーキングなどの体験活動といった日本遺産ストーリーに付加価値を促す取組は、観光にとどまらない市民的参加を促進し、日本遺産による地域住民の活力という内発的なまちづくり、地域力の活性化にも寄与できるものと感じた。

今後の展開では、「DMO」（観光地域づくり法人）を活用した持続可能な地域経済の活性化や観光地域づくりの展開が課題であると感じている。行政とDMOや産学共同などあらたな可能性とともに、行政ならびに市民との協働など連携や調整、または利害や葛藤も生じることも予想されるもとの、どのように具現化していくのか、新たな問題意識を抱くことができた。

●小林秀司委員

現在日本遺産プレミアムとなっているこのストーリー。コンテンツへの認識は恥ずかしながら個人的には持ち合わせていなかった。この視察がなければそれほど知ることはなかったであろう内容。認知度の高まり来訪の動機など「日本遺産認定」「プレミアムの認定」そういった意味で既に一定の効果が得ていることである。強力なコンテンツは正直ない中でのストーリーの磨き上げ、プレミアム認定を得たことは、たゆまぬ取組とこの日本遺産にかける地域の並々ならぬ意気込みを感じた。周辺の人口、都市、経済規模などに捉われがちだが、この制度ではそこに左右されず活かすことができることが証明されたと言える。

本市における取組も「モノ消費」から「コト消費」含め磨き上げの取組を高める必要があると感じ、本ストーリーを深く考察する必要があると感じた。

●星野直美委員

若狭地域は古代より「御食国」として京の都に海産物を供給し、鯖街道を通じて都と結ばれた物流文化を形成してきた。近年では、日本遺産認定を契機に廻船問屋「護松園」が地域住民と協力して歴史的建造物を保存・活用し、日本遺産の発信拠点として整備された。館内では鯖街道の歴史や若狭塗などの伝統工芸が紹介・販売されているが、若狭塗は後継者不足により文化継承が課題となっている。文化の持続には伝統技術の継承が不可欠である。また、鯖街道マラソンや高校生によるサバの宇宙食開発など、次世代への継承と市民の意識啓発の取組も進められており、楽しみながら文化を学ぶ機会となっている。こうした地域総がかりの活動が評価され、2024年、全国初の「日本遺産プレミアム」に選定された。

今回の視察では、小浜市の事例に加え、地域の伝統産業を活かした体験型観光の重要性を再認識した。八王子市では「オープンファクトリー」による工房・工場の公開やものづくり体験が展開されており、日本遺産と連携することで地

域資源の魅力発信が期待される。さらに、観光地域づくり法人（DMO）から観光地域経営法人（DMC）への移行が進む中、持続可能な観光戦略の再構築が求められている。DMC は収益性や地域経済への波及効果を重視し、地域の文化や産業を活かした観光展開において中心的な役割を担う存在である。日本遺産の継続的な価値創出においても、その機能は極めて重要であると認識した。

●吉本孝良委員

小浜市が日本遺産プレミアム（特別重点支援地域）になったプロセスを学べたことは大変勉強になった。日本遺産は観光としての集客力が弱いため、小浜市では「食のまちづくり条例」を策定し、これを木に例える幹として、価値あるもの、魅力あるものを民間団体と協力する。これを主導しているのが観光協会であり、観光地の回遊キャンペーンを作成。また、地域や現場との距離が近い「道の駅」が先頭になり、商品開発の企画を作る事によって、民間との連携を作っている。文化資源の保存活用においては、これまで非公開であった文化財の観光拠点化、文化価値の明確化と、それらをしっかりと発信することで、経済や観光の魅力向上に繋がり、来訪者が増加しているとの説明があった。まさに「御食国若狭と鯖街道」を活かし文化・観光・経済の好循環を生んでいた。

やはり今回の視察にて感じた事は行政の本気度、特に市長の強いリーダーシップの中で、地域や、団体がそれぞれ役割分担ができている。自治体の進むべき方向性が同じ方向に向いていると感じた。

●中島正寿委員

2015 年度に「御食国若狭と鯖街道」は日本遺産第 1 号認定をうけた後、2024 年には全国で唯一の「日本遺産プレミアム（特別重点支援地域）」に選定されているが、文化、観光、経済への好循環を目指した様々な取組が戦略的によく練られていると感じた。それぞれ素晴らしい取組が展開されているが、中でも目を引いたのは高校生、大学生を入れた事業において、小浜市が育んできた歴史・文化財を活用して、現代が抱える課題へのメッセージ性をもたせた事業へとつなげた取組である。細やかな事業にも見えるが、歴史の単なる保存に留まらない、日本遺産活用のベクトルの一つを見せたものとして評価したいし、その観光事業化にも取り組まれているので、今後も取組を着実に重ねられ成功裏に導かれることを期待している。

視察の様子



視察日及び視察先	10月16日（木）岐阜県 岐阜市
視 察 内 容	<p>① 日本遺産等を生かした地域振興について （日本遺産：「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜）</p> <p>② MICEの推進と地域の活性化について</p>
概 要	<p>岐阜市は、平成27年度に日本遺産第1弾のひとつとして認定され、今年2月には「重点支援地域」に認定されている。官民連携による「ぎふ歴史遺産活用推進協議会」を設立し、文化財の保存・活用、観光振興、地域活性化を一体的に推進している。</p> <p>また、岐阜市は「日本の真ん中で話そう」をキーワードに、MICE誘致を積極的に推進している都市であり、地域資源を生かした戦略的なプロモーションや施設整備を通じて、国際会議観光都市としての地位を確立しつつある。特に、長良川河畔に広がる「世界イベント村ぎふ」などの特色あるMICE施設群や、岐阜観光コンベンション協会による官民連携の取組は、地方都市におけるMICE推進の先進事例といえる。</p> <p>これらの歴史的象徴性を生かした地域ブランディングや、地域資源の魅力発信に関する取組を学び、本市における産業振興施策への参考とするため、視察を実施した。</p>
委員長所感 （意見・課題・本市への反映など）	<p>●石井宏和委員長</p> <p>① 「信長公のおもてなし」という意外なストーリーで日本遺産第1号になり、今年重点支援地域に認定された岐阜城の城下町は、市街地の大半が破壊された終戦の年の大空襲の被害も免れ、戦国時代から道の形など変わっていないことも全国的に見ても稀有で貴重で、相当な趣がある。「地上の楽園」と表現したルイス・フロイスの報告書などから復元されつつある山麓の居館跡と過日の想像図もすばらしく、今の庭園も見事な岐阜公園に今年設けられた岐阜楽市は黄金色に輝いていて、当時の楽市楽座の賑わいを想像しながらの散策も楽しめた。</p> <p>武田信玄の使者、秋山伯耆守に対する信長のおもてなしで鵜飼見物が行われたのが、鵜飼に関する最も古い記録だとの説明があったが、この使者は信玄の娘の結婚準備のため訪れたとのことで、八王子に落ち延びて晩年を過ごした松姫との縁があったことにも驚いた。長良川の鵜飼だけでなく、岐阜城などのライトアップや長良川夜市など、夜の観光の充実に努めていることは魅力的で、宿泊してゆったりと過ごしてもらえる観光客を増やすことにもつながるいい取組だと思う。本市の文化財を生かした観光でも、夜の魅力を高めたいものだと痛感した。</p> <p>また、美濃和紙を使った岐阜提灯と岐阜和傘は国指定の伝統的工芸品、岐阜団扇は岐阜県郷土工芸品で、それぞれ日本遺産の構成文化財にもなっていることも貴重で、八王子市でもあらためて多摩織などの工芸品の魅力の発信に努めたいものと思った。</p> <p>② MICE誘致の中心でもある岐阜観光コンベンション協会は、2013年に公益財団法人になり、今年地域DMOに登録された。近年のコンベンション開</p>

	<p>催件数の推移の資料によれば、コロナ禍で落ち込んだ3年間以外は安定して250件以上の開催があり、そのうちここ2年は特にスポーツの催しが120件以上と半数近くを占めている。去年発足したMICE誘致推進会議は、市や県、大学や学会、会議場などの施設や宿泊事業者などのステークホルダーが一堂に会して情報や戦略の共有など進めるもので、これまで3回会議を開いてきたとのことで、見習いたいものだと感じた。</p> <p>岐阜市の強みとして、長良川国際会議場など4つのコンベンション施設が近距離にあり、宿泊施設も近く、5,000人以上泊まれることに加え、日本遺産の岐阜城や鶯飼など文化・観光資源も豊富なことがある。さらに、アフターコンベンションとして、郡上踊りや長良川鉄道、関ヶ原や高山や白川郷などの案内もしているとのことで、八王子市でも、市内の文化財のほか、奥多摩など近隣の観光の案内をしたり、都心部のMICEのアフターコンベンションとして高尾山などをアピールしたりすることも大事だと思った。日本遺産のストーリー「信長公のおもてなし」はMICEと親和的で、インバウンドを含めた来街者に食事や催しなどを含めてサービスを充実させることに自然につながるようでもあり、今後さらに魅力を高めるということで、注視したい。</p>
<p>委員所感 (意見・課題・本市への反映など)</p>	<p>●古里幸太郎副委員長</p> <p>① 織田信長公という圧倒的なキャラクターの強さは、日本遺産においても観光においても突出しているように思えた。歴史的なバックボーンも強みであると感じた。信長公のおもてなしを息づかせたまちづくりや観光をもって日本遺産認定都市となり、その3つのポイントからは信長公そのものを感じさせる取組となっていることが、人為的ではなく、歴史がそうさせているまちの魅力と捉えた。そのような中で、令和3年の日本遺産総括評価・継続審査で一度条件付き認定となるも、その後、本年令和7年に2ランクアップの重点支援地域の認定を受けられた取組には、非常にご苦労があったことと思う。</p> <p>文化庁からの4つの指摘「民間主導の体制かどうか」「体験ツアーの有無」「マーケティングに基づいた取組になっているか」「新しい提案があるか」は、八王子市が今後、日本遺産認定都市であり続けるための具体点として非常に勉強になった。岐阜市の日本遺産に関するハード事業、ソフト事業それぞれが考え抜かれた取組であり、それが周囲にも伝播し、まちの魅力を一層引き上げているように感じた。</p> <p>② 日本遺産事業と関連した岐阜市のMICE事業は、八王子市がこれから観光強化や経済効果をあげる施策を練り上げていく上で、非常に勉強になった。地域DMOは大事だと痛感した。MICEといっても委託業者へ投げるだけではなく、市と観光コンベンション協会が一層協力し、明確なビジョンを描いていくことが大事であると思った。岐阜市は、昼と夜でそれぞれにまちや観光に魅力がある。岐阜城ひとつとっても思い切った夜の貸切があったり、昼は岐阜城楽市で、夜は付加価値をつけた遊覧船で長良川の鶯飼を楽しんだり観光面でも宿泊まで見越した動線が描かれていることは勉強になった。</p> <p>他に、今回直接見ることはできなかったが、4つのコンベンション施設群「世</p>

界イベント村ぎふ」は、徒歩圏内でコンパクトに大型複合MICE施設群としてまとまっているためMICEの軸として非常に強く、これからの取組次第では益々の賑わいを見せるポテンシャルを高く感じた。八王子市における地域活性化に向けて成すべきことを整理し、官民が一体となったMICE推進に、視察での学びを活かしていきたいと思う。

●高橋剛委員

① 信長公のおもてなし、というタイトルの意味合いの秀逸さに感動た。信長＝怖い人、というのは確かに誰もが持っている印象で、それを地元といえども冷静に客観的に判断し、観光客にその怖いイメージを払拭するための「おもてなし」としている。そのギャップに人は興味をもち、あの信長がおもてなしってなんだ？と知りたくなる。そして岐阜城や楽市楽座に触れることで、歴史を感じることが出来たり、長年続く鵜飼にも実際に触れることができることで、日本遺産への関心と自分の地域のこと、自分事として捉えることが出来るようになっていと思う。強みをどうしたら広く伝わるかという『客観的な目線』の重要性を知り、八王子市でもどのように活かせるか、参考となった。

② 名古屋や東京からもアクセスしやすいメリットをわかりやすくまとめ、MICEの誘致に積極的に取り組んでいる。大型ではなく中規模のMICEに照準を絞り、地域の中でホールやスポーツ施設も集中させることで、観光の中で色んな選択肢を与えられるように工夫されている。

またMICEのパンフレットも非常に分かりやすく、施設の細かな部分や、地域のホテルの部屋数など、主催者が知りたい情報をひとまとめにして、主催者ファーストのパンフレットだなと感じた。明確にターゲットを絞り、効果的なアプローチをしていくことで、高い効果が生まれるのだと感じ、八王子市も都心部からのアクセスの良さを強みとしている以上、岐阜市のMICEの取り組みは非常に参考になった。

●九鬼ともみ委員

① 岐阜市は、文化資源を「見せる力」で磨き上げ、観光と結びつけて発信している点が特徴的だと感じた。特に印象に残ったのは、「月と岐阜城」を捉えた写真である。クレーターまで鮮明に写る月を背に浮かび上がる姿は強いインパクトがあり、合成と思うほどであったが、望遠で撮影された実際の風景だと知り驚いた。岐阜城という存在が持つ唯一性を象徴する一例だと感じる。

また、長良川の鵜飼も岐阜ならではの文化であり、市の魅力を形づくる大きな要素となっている。そこに加えて、織田信長という歴史上の人物を「意外性」という視点で現代的に見せている点が印象に残った。単に歴史を説明するのではなく、文化を魅力的に翻訳し、回遊性の向上と観光施策につなげようとする工夫がうかがえた。

文化を観光戦略と結びつけ、都市の魅力として提示する姿勢は岐阜市の強みだと感じる。八王子市でも、文化資源の見せ方や伝え方を工夫していくことが、地域の魅力向上や来訪者の増加につながるヒントになると感じた視察であっ

た。

② 岐阜市におけるMICE開催の特長として挙げる「GIFU JAPAN The City of Breakthroughs」は、楽市楽座によって人・モノ・情報の交流を促した織田信長の姿勢に倣い、“新しい交流のかたちを生み出す都市”というメッセージがよく表れており、岐阜らしい物語性のある打ち出し方だと感じた。主要施設と宿泊拠点が隣接し、移動の負担が少なく参加者や主催者にとってストレスの少ない開催環境が整っている点が岐阜市のMICE戦略の大きな特徴であり、加えて都市エリアと岐阜城などの観光施設や、長良川の自然・鶺鴒といった風景が近接していることで、会議と滞在のオン／オフを切り替えながら過ごせる点も大きな魅力と感じた。

今回の視察を通じて、MICEを行政施策として進めるうえでは、誘致プロモーションだけでなく、開催地そのものの魅力を高め、受け入れ環境を整備していく視点が欠かせないことを学んだ。八王子市においても、地域の特色を整理し、磨き上げ、共有していくプロセスを大切にすることで、都市の価値を高め、いく可能性があると感じた視察だった。

●市川克宏委員

① 日本遺産の推進体制を2024年以降から「未来の岐阜ツーリズム会議」(DMO会議)との連携強化を図り、観光地域のマネジメントやマーケティングとプロモーション、行政、観光事業者、住民などをつなぎ、地域全体で観光戦略を共有・実行する観光による地域経済の活性化などの取組にスケールの大きさを感じた。特に、日本遺産に関するソフト事業の展開にあたり、マーケティングに基づいた戦略は、日本遺産体験の提供から文化財継承、情報発信、インバウンド対応、さらに夜の観光を手掛けるなどの新しい挑戦に力強さを感じた。

DMOの活用によって、地域のまちづくりに多大な影響を与える事業なので、地域福祉や公共政策、インフラや市民生活の関係性や影響などにも考慮した取り組みも視野に入れることが大事ではないかと感じた。観光振興にとどまらない、地域の未来を地域住民とともにどのようにデザインしていくのか、という視点も入れて考えてみたい。

② 1988年の岐阜市国際コンベンション・シティの指定から30年にわたる岐阜市と岐阜観光コンベンション協会の歴史と取り組みを拝聴し、長期的で戦略的な位置づけと都市デザインの位置づけの重要性を学ぶことができた。

MICE事業にあたっては、都市戦略や都市デザインの大きな視点が要求される。交通アクセスや宿泊施設機能、また大学間協力や自然と都市機能の整備など、すべてが兼ね備えた自治体はレアに等しいと思う。それだけに、自治体として近隣自治体との広域的な連携と協力も検討していくことが必要だろうと感じている。

MICE戦略にあたって都市デザイン、戦略といったマクロ的なまちづくりや思考と、産業振興(観光)との融合や展開が考えられるが、市民的な協働や

まちづくりという視点との整合性をはかり、地域の活性化につなげていくのか、という今後の展望についての問題意識を持つことができた。

●小林秀司委員

① 日本遺産認定第1号のストーリー、「織田信長」という日本のみならず世界でも知られる「強力なコンテンツ」を有する日本遺産、これまでも様々な地域で活用がなされている「織田信長」認定後の「磨き上げ」をどのように実施したか注目した。令和3年度「日本遺産」の総括評価・継続審査では条件付きの認定だったが、令和6年度には条件解除となった。令和3年度評価では「金華山・長良川などを核とする従来からの観光戦略と、日本遺産になったことによる新たな戦略が必ずしも明確になっていないため、信長の特性を体現した岐阜城、その不断の調査・研究が、一つの中核を担うことを意識して進めてほしい。」と評されており、強力なコンテンツに頼るだけではなくストーリーの磨き上げに取り組まねばならないと改めて感じた。

② 「名古屋」という大都市圏に隣接する岐阜市、東京都心部に隣接する本市との共通性を感じた。一方で国際会議場を有し、MICE事業へ30年以上取り組んできた実績の基で日々変化する条件等に対応しており、これを本市に活かす為にしっかりとした考察をすべきと感じた。コンパクトな開催ができる各施設が隣接し所在する「世界イベント村ぎふ」や古くから観光都心の要素を持ち多くの宿泊施設を備えていることなど、アドバンテージとなる要素で本市では少し足りない部分もあるが、一方で学園都市、交通事情など本市がもつ強みを再確認し、それらを踏まえた上でターゲットをより明確にして取り組む必要があると感じた。「事業の支援補助金」に頼らず「足りない部分」を補い、選ばれるMICE都市になるべく考察し実施しなければならないと感じた。

●星野直美委員

① 岐阜市の「信長公のおもてなし」は、織田信長の知られざる一面を巧みに活かした地域振興の好例である。冷徹な軍略家として恐れられた信長が、実は美食家であり、文化を愛した人物だったというギャップは、観光資源として極めて魅力的だ。宣教師ルイス・フロイスの書簡には、信長が鮎の質を自ら確かめ、来賓に鵜飼や能を披露するなど、繊細なおもてなしを行っていた様子が記されていると説明があった。岐阜城は金華山の頂にそびえ、夜景や満月と重なると、まるで信長の威厳が現代に蘇るような幻想的な雰囲気写真から感じられた。その姿には、信長の冷徹さと美意識が融合した“冷徹な美しさ”が宿っている。こうした物語性を活かした観光商品として、岐阜城天守閣の夜間貸切プランも人気を集め、日本遺産の活用事例として文化庁から高く評価され、重点支援地域に認定された。

一方、八王子市には信長や岐阜城のような象徴的資源はないが、氏照の忠義や八王子城跡の静寂、滅びの美学といった“静かな感動”を生む物語がある。岐阜市が信長の“冷徹な美しさ”を活かしたように、八王子市では氏照の“忠義と滅びの美学”を軸にした物語づくりが地域振興の鍵になると思った。高尾山

はその舞台として、歴史と自然をつなぐ重要な存在であると考えている。

② 岐阜市は 1988 年に観光コンベンション協会を設立し、全国でも早期に M I C E 推進体制を整えた都市である。視察では、施設の充実に加え、地域文化や大学との連携が一体となった開催環境に、完成度の高さを感じた。特に日本遺産や鶯飼などの地域資源をユニークベニューとして活用し、地域全体を M I C E 空間として設計する発想が印象的であった。

八王子市においても「駅近・コンパクト開催」という共通の強みを活かしつつ、高尾山薬王院、八王子城跡、大学キャンパスなどを積極的にユニークベニューとして活用することで、日帰り型や、参加者が地域の文化・自然・人々と直接触れ合うことを重視したスタイルであり、地域資源を活かした体験を通じて、学びと感性の両面から価値を提供している。特に高尾山薬王院では、既存の観光プログラムを基盤に、企業研修や環境教育フォーラムなどを組み込んだ、会議や研修に地域ならではの体験要素を加え、参加者が知的交流と文化的体験を同時に得られることは有効であると感じた。施設数の制約はあるが、地域資源・大学・公共空間を組み合わせた分散型の M I C E の設計によって、多様なテーマに対応できると思う。今後も、地域全体をどう使うかが課題だと感じた。

●吉本孝良委員

① 岐阜市の日本遺産は明確な柱があり、それを中心にハード面の整備を行政が行い、ソフト面は民間が考えるといった分かりやすい分業がうまく事業展開されていると感じた。明確な柱である岐阜城の天守閣をはじめとするおもてなし空間整備として、天守閣耐震化、樹木管理などを行い、交通アクセスの整備として、駐車場の拡幅や自動運転バス、シェアサイクル等の事業情報発信施設の整備を行っている。長良川水辺の拠点整備、城下町エリアの魅力向上。これらを受けて、しっかりとしたマーケット戦略を設定しており、①本物志向で岐阜に興味を持つ首都圏の観光客 ②日本の歴史・文化が大好きな訪日外国人観光客 ③名古屋都市層を中心としたアクティブな若年層 ④M I C E に参加して、岐阜市を訪れる団体、という明確な戦略設定をしている。

また、学校教育の中でもしっかりと岐阜市の日本遺産を理解させる取組を行っている。さらに観光部分の工夫によって、来訪したくなるような取り組みも行われていた。本市も明確な戦略を選定する必要性があると感じた。

② M I C E 推進に当たっては観光コンベンション協会なくして進まないと感じた。岐阜市においては近隣に長良川国際会議場、岐阜メモリアルセンター、岐阜県長良川スポーツプラザ、ぎふ清流文化プラザという 4 つのコンベンション施設があり、大中様々な学会などに対応することが可能な地域であり、宿泊ベッド数も 2,843 室を有する地域である。コンベンション施設を利用して頂き、宿泊、観光をして貰えるまちづくりを地域全体で行っていた。500 名を超える学会には、タクシー等に歓迎の表示を行うなどのおもてなしを行うなどの事業も行っていた。

行政も M I C E 開催に当たって補助金制度を設けるなど、本市と同じ誘致活動

をおこなっているが、本市が得意とする小規模な学会とは違い、大きな学会においても、しっかりと観光や商業とも連携をしている。観光商業施設「岐阜城楽市」を開業させ、地元食材を使った地元の文化を感じられる食事等の提供もしており、地域において全部で取り組んでいることを強く感じた。

●中島正寿委員

① 戦国時代に、織田信長が天下統一を目指すうえで重要な戦略拠点とした「岐阜城」。信長公は、この城を軍事拠点としてだけでなく、「地上の楽園」と称された山麓居館、長良川での鵜飼観覧など、信長流のおもてなしで世界の賓客をも魅了する“文化拠点”とした様子がよく理解できた。信長公のそうした“おもてなし”を現代に受け継ぎ、行政と民間の協働により、ハード事業、ソフト事業を展開。学校教育へも位置づけて日本遺産にふれるイベントを実施し、次世代への歴史文化継承の取組も感じられた。

岐阜城は平成23年2月に国史跡に指定され、令和3年12月に『史跡岐阜城跡整備基本計画』を策定したが、先行して(平成30年度から)始まっていた山上部の発掘調査により当時の石垣や城郭の姿が判明しつつあり、信長公のおもてなし空間も見えてきたことは歴史ファンが注目するところである。本市の八王子城跡の取組にも参考とされたい。

② 岐阜市は1994年に国際会議観光都市の認定を受けている。多様なMICE施設に恵まれており、観光を基軸とした持続可能なまちづくりを展開している。とくに長良川国際会議場など4つのコンベンション施設群は世界でも類例がなく、コロナ禍を乗り越えてコンベンション件数もスポーツを先頭に回復している。岐阜市へは国内の東西から、また海外からアクセスがしやすく、大きなメリットをもっている。その意味でも、国際観光都市・岐阜におけるMICEをそのグランドデザインの中でどのように位置付けていくか、コロナ禍の経験もさらなるブラッシュアップの契機になったのではないかな。

今後は時代の流れとして、デジタル化が避けられないが、参加者の自由なスタイルを許容できる、柔軟かつ幅のある次世代のMICE事業も構築されてこよう。MICE誘致における都市間競争を勝ち抜くにはデジタル・プロモーションも鍵を握るかもしれない。

視察の様子

